

「人種のるつぼ」ふたたび

おおた しんぺい
太田 心平 民博 民族社会研究部

「るつぼ」から「サラダ鉢」へ

二〇世紀の初頭、米国の都市部をさして「人種のるつぼ」ということが世に飛び交った。ここで「人種」というのは、白人人種とか黄色人種というような人種のことではなく、むしろ民族的出自を指す。よって、「人種のるつぼ」

は、多彩な民族的出自の人びとが、身も心も融合していく場を意味する。このことは、都市部だけに限らず、多民族国家である米国という国全体にとって、深い含意ももっていた。

だが、二〇世紀後半、これには異議が唱えられた。米国の都市部は、いつまでたっても多々の民族が乱立する集合体で、融合の場などというには程遠いからである。むしろ、混在の場、多彩な野菜が盛りつけられたサラダ鉢のようなものだという意味で、「人種のサラダボール」という新語が、これにとつて代わるようになった。また、一九七〇年代には多文化主義の考えが台頭し、無理にるつぼを指すより、サラダ鉢のままがいいという思考も広まった。

現在の日本でも、「るつぼ」ではなく、本当はサラダ鉢らしい」という話が、すでに行きわたった感がある。



ロサンゼルス市ユニオン駅の壁画。多様な民族的出自の存在と相互協力をうたう (2012年11月)

「るつぼ」も捨てたもんじゃない

ところが近年、なんと、当の米国で「人種のるつぼ」論が見なおされてきた。

きっかけは、米国在住者の身体的特徴が二〇世紀にどう変わったのかを明らかにしたいくつかの学術記事だ。そこで明かされた事実のひとつに、白人とよばれる人びとの身体に関する統計がある。二〇世紀中葉まで多種多様だった白人の瞳や髪の色が、この半世紀で著しく画一化したそうだ。青や緑や灰色の瞳、金髪や赤毛は、白人のなかでも激減したという。これら激減したのは、いずれも劣勢遺伝子による身体的特徴である。これらがこれほど急速に減少しているということは、米国の、とくに都市部では、民族的出自の融合が、低速ながらもたしかに進んでいることを意味する。一部の研究者たちは、そう結論づけている。

「人種のるつぼ」論は、現実としても、理想としても、消えたわけではない。かつて、るつぼにとつて代わったサラダ鉢では、野菜たちの見た目が融合しつつあるようだ。「もしかして、るつぼが正しかったのではないか」という考えが、あらためて米国に広まりつつある。